平成 25 年度　千代田学

「千代田区内の子どもの野外活動体験プログラムの開発」

成果報告書

平成 26 年 3 月

大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター

目　次

1　はじめに…… 5
2　事業の概要…… 7
3　事業の実施体制…… 9
4　実施した事業内容…… 11
5　野外活動支援員育成プログラム実施と連携……12
　1　応募・受講者
　2　受講者の評価
6　宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行う意義についての調査研究……21
　1　調査問題の開発
　2　調査結果と結論
7　宿泊を伴う自然体験･野外体験活動プログラムの開発と実施……31
　1　活動のねらいと概要
　2　企画スケジュール
　3　成果と課題
8　事業評価（外部評価）…… 37
9　本事業のまとめ（内部評価）…… 39
10　おわりに…… 41

1　はじめに

千代田学「千代田区内の子どもの野外活動体験プログラムの開発」は、都市部に住む子どもの自然体験の不足を補い理科の学力の向上に寄与することを目的としている。その一つの方法として、大妻女子大学児童臨床研究センターと千代田区教育委員会が協力して、学年の早い段階からの宿泊をともなう野外体験を含む自然体験の場を企画した。

この宿泊体験を通して、千代田区内の公立小学校、幼稚園、保育園、子ども園に通う子どもの野外体験の実態を調査するとともに、子どもの実態や成長発達を土台にした野外活動プログラムの開発と開発プログラムの活動を支援員の育成を行い、プログラムの効果を測定していく。

野外活動宿泊体験の実施に先立ち、以下の準備をした。

①　野外活動支援員育成プログラムとの連動

将来、教員免許や保育士資格を取得して現場に立つ学生を中心に、教育・保育活動時の野外活動における基礎知識や基礎技能を身に付ける研修を行う野外活動支援員育成プログラムを実施した。講師は、大妻女子大学教員及び幼稚園等での現場経験者であり、講義のみでなく実際に体験をする実習的研修も含めることができるようにした。

②　宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行う意義についての調査研究

現在、千代田区内の公立小学校では、小学校第 4 学年から第 6 学年まで宿泊を伴う自然体験･野外体験活動が実施されている。こうした宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行う教育的な意義を調査し、宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行う意義を明らかにする。そのために、意識調査問題の開発、宿泊を伴う自然体験･野外体験活動前後での意識の違いの調査並びに、宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行っている学校と行っていない学校での比較調査を行った。

以上の①、②の準備を行い次の③のプログラム開発と実施の運びとなる。

③　宿泊を伴う自然体験･野外体験活動プログラムの開発と実施

千代田区内並びに近隣の小学校第 4 学年以上を対象とした宿泊を伴う自然体験･野外体験活動プログラムを開発、実施した。

実施後は、外部評価委員会を実施した。評価委員は外部のそれぞれの専門家にお願いしたが、おおむね高い評価を得た。さらに、プログラムの充実を図るための課題も整理された。

最後になったが、千代田区教育委員会育成指導課課長・指導主事と相談協議の上、教育委員会との相互協力のもとでプログラムが作成されたこと、受講者や参加児童の募集においても千代田区教育委員会のご協力を得た。

プログラムの開発は、千代田区のご協力のもと、実施できたことに鑑み、心よりお礼申し上げる。

平成 26 年 3 月　吉日

大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター
所長　阿部　和子

2　事業の概要

(1)　名称

千代田区内の子どもの野外活動体験プログラムの開発

(2)　趣旨

千代田区においては、都市中心部に住む子どもの傾向の一つとして、野外体験を含む自然体験の不足が指摘されてきている。また、それとともに、各種の学力調査において小学生が、他の教科に比べて理科の内容が低い傾向があることも指摘されている。こうした中で、かねてから学校教育では宿泊を伴った活動を早い学年段階から取り入れることを行ってきている。しかし、学校教育への様々な期待が高まる中で、宿泊を伴う行事にかける時間やそのあり方も見直されてきている。

そこで、大妻女子大学児童臨床研究センターと千代田区教育委員会が協力して、千代田区内の公立小学校、幼稚園、保育園、こども園に通う子どもの野外体験の実態を調査するとともに、子どもの成長に見合った野外活動体験プログラムの開発と、開発プログラムの活動を支援する支援員の育成を行い、それらの効果を測定していく。

(3)　内容

①　野外活動支援員育成プログラムとの連動

将来、教員免許や保育士資格を取得して現場に立つ学生を中心に、教育・保育活動時の野外活動における基礎知識や基礎技能を身に付ける研修を行う野外活動支援員育成プログラムを実施した。講師は、大妻女子大学教員及び幼稚園等での現場経験者であり、講義のみでなく実際に体験をする実習的研修も含めることができるようにした。

また、③の児童対象の開発プログラムに育成プログラム修了生が参加し支援を行った。

②　宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行う意義についての調査研究

現在、千代田区内の公立小学校では、小学校第 4 学年から第 6 学年まで宿泊を伴う自然体験･野外体験活動が実施されている。こうした宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行う教育的な意義を調査し、宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行う意義を明らかにする。そのために、意識調査問題の開発、宿泊を伴う自然体験･野外体験活動前後での意識の違いの調査並びに、宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行っている学校と、行っていない学校での比較調査を行った。

③　宿泊を伴う自然体験･野外体験活動プログラムの開発と実施

千代田区内並びに近隣の小学校第 4 学年以上を対象とした宿泊を伴う自然体験・野外体験活動プログラムを開発、実施した。その際に、①で開発した調査問題を対象児童に実施するとともに、①の結果の一部を開発に生かしていった。

(4)　事業の期間

平成 25 年 4 月 1 日　～　平成 26 年 3 月 31 日

(5)　事業の実施日程

本事業は、表 1 の通りに実施された。

表 1.　事業の実施日程

日程	事　業　の　内　容
4月1日	事務局の設置
4月上旬	自然体験・野外活動の効果測定調査問題の開発･予備調査の実施
4月中旬	野外活動プログラムの研修内容と研修講師の決定
4月下旬 ～5月中旬	野外活動プログラム　受講生の募集
5月下旬	野外活動プログラム　受講生の決定、受講前アンケート配布・回収
6月上旬	児童野外活動体験プログラムの計画作成
6月5日	野外活動支援員育成プログラム　講座開始
6月中旬	野外活動体験活動プログラムの参加児童の募集
6月下旬	児童野外活動体験プログラムの詳細計画作成
7月10日	野外活動支援員育成プログラム　講座終了、派遣活動を本格的に開始
7月中旬	自然体験・野外活動の効果測定調査の実施
7・8月	自然体験・野外活動の効果測定調査結果の分析
8月5日	児童野外体験活動プログラム説明会の開催
8月25・26日	児童野外体験活動プログラムの実施
9月4日	児童野外体験活動プログラム事後指導の実施
10月	自然体験・野外活動の効果測定調査と開発プログラム前後調査の分析･評価
12月1日	野外活動支援員育成プログラム　受講後アンケート回収
3月10日	外部評価委員会開催
3月29日	さくらフェスティバル発表（紙上発表）
3月31日	事業終了日

3 事業の実施体制

(1) 事務局

本プログラムの運営、研修､開発プログラムに必要な書類の作成及び管理、講師、受講生との連絡等を実際に行う組織として､大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター内に事務局を置いた。

児童臨床研究センター所長（1 名)、インテークワーカー（1 名)、助手（1 名）のほか、事務を取り扱う非常勤の専任スタッフ（1 名）を配置した。

(2) 外部評価委員

本事業の運営・管理、プログラム内容、受講生の現場での貢献度、地域への貢献度など全体的な事業評価を行うことを目的とした外部評価委員会を、平成 26 年 3 月 10 日（月）13 時から 2 時間程度行った。評価委員には、表 2 の通り、他大学の関係者や現場の教員に依頼した。

表 2. 外部評価委員

氏　名	所　　属
加藤　奈保美	河野心理教育研究所
角屋　重樹	日本体育大学
高橋　　昇	私立原釜幼稚園
林　四郎	北区教育委員会

(3) 各事業担当

野外活動支援員育成プログラム、自然体験・野外活動調査、自然体験･野外体験活動開発プログラム、はそれぞれ、表 3 に示すメンバーが中心となってプログラムを開発・検討した。

表 3.　プログラム担当者名

プログラム名	氏　　名
野外活動支援員育成プログラム	川之上　豊・加藤悦雄
自然体験･野外体験活動調査	石井雅幸
自然体験･野外体験活動開発プログラム	石井雅幸･加藤悦雄

（全て本学教員）

(4) 関連団体との連携状況

本委託事業は、千代田区教育委員会と連携を図りながら企画・運営をしている。千代田区教育委員会とは、次のような点で連携を図ることができた。

①千代田区教育委員会育成指導課課長・指導主事と相談協議の上、教育委員会との相互協力のもとでプログラムを作成していった。

②受講者･参加児童の募集において千代田区教育委員会に協力していただくことにより、地域の人々への情報発信の体制を作ることができた。

③野外活動支援員育成プログラムでは、実際に千代田区立幼稚園や保育園の野外活動に、支援員を派遣させていただいた。

4　実施した事業内容

(1)　野外活動支援員育成プログラム実施と連携

表 4.　野外活動支援員育成プログラム

No	日時	コマ数	内容	講師	場所
1	6月5日（水） 16:20～17:50	1	オリエンテーション及び野外キャンプの準備①	大妻女子大学 加藤悦雄	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎3階357教室
2	6月12日（水） 16:20～17:50	1	グループワークによる野外キャンプの準備②	大妻女子大学 加藤悦雄	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎3階357教室
3	6月22日（土）13:00～ 6月23日（日）15:00	3	野外キャンプ（野外生活・自然体験活動）の実践	大妻女子大学　加藤悦雄 川之上豊、石井雅幸	氷川キャンプ場 東京都西多摩郡奥多摩町 氷川702
4	6月23日（日） 9:30～12:30	2	自然の中での遊び支援実習	ELFIN体験共育クラブ 北澤伸之	
5	6月26日（水） 16:20～17:50	1	小学校での野外キャンプの意義と実際	元北区滝野川小学校 林四郎	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎3階357教室
6	6月26日（水） 18:00～19:30	1	野外での救急法①－けが等の対応と処置方法について	元甲府看護学校 田中喜久美	
7	6月29日（土） 14:40～17:50	2	幼児等の野外引率に関わる安全管理とリスクマネージメントについて	ひさみ幼稚園 峯岩男	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎3階357教室 北の丸公園での校外活動を含む
8	7月3日（水） 16:20～17:50	1	子どもにとっての野外活動の必要性と特別支援の子ども達への支援方法について	大妻女子大学 柴崎正行	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎3階357教室
9	7月4日（木） 18:00～19:30	1	野外での救急法②－腹痛等の対応と処置方法について	慈恵医科大学病院 吉澤穣治	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎6階650教室
10	7月10日（水） 16:20～17:50	1	派遣先についての案内と説明	大妻女子大学 加藤悦雄	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎3階357教室
11	7月10日（水） 18:00～19:30	1	野外での危険な植物や虫等の対応について	東京大学大学院 須田真一	

なお、野外活動支援員育成プログラムの講義終了後から、受講認定された受講生は、主に千代田区内の幼稚園・保育園・小学校に野外活動支援員として活動を行った。今年度は、6 施設に計 23 回、延べ 39 人が支援員として現場に入った。

(2)　宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行う意義についての調査研究

自然体験･野外活動を行う意義を道徳的な価値等から言及するものが多く見られた。そこで、小学校学習指導要領が定める道徳の価値目標をもとに質問紙を作成した。作成した質問紙を用いて、小学校第 4 学年から宿泊体験活動を行う千代田区内公立小学校と千代田区以外の小学校第 5 学年から宿泊行事を行う埼玉県の公立小学校第 4 学年から第 6 学年までの意識調査を行った。また、小中学生が参加する自然体験教室で行う宿泊体験学習前後での意識の違いを調査した。その結果を基に、宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行う教育的な意義を検討した。

(3)　宿泊を伴う自然体験･野外体験活動プログラムの開発と実施

(2)の調査結果や(1)の支援育成プログラムを実施してきて得た知見、並びに千代田区内の公立小学校が行っている宿泊を伴う自然体験･野外活動とは異なる趣旨の自然体験･野外体験活動プログラムの開発を行い、継続的に行うことが可能であるかの検討を行った。

5　野外活動支援員育成プログラム実施と連携

1　応募者・受講者

(1) 応募方法

参加者の募集は、大妻女子大学学生、近隣大学学生を中心に募集をした。

大妻女子大学学生への募集方法としては、本学ホームページ、本センターホームページ、ポスター掲示でプログラムを紹介し、指定の時間に興味のある人を一堂に集めプログラムに関する説明会を行った。近隣大学には、ポスターと募集要項を大学事務局宛に送付し、学生向けに掲示をしていただけるようお願いをした。

(2) 応募者・受講者数

応募者数 20 名に対し、受講者数は 17 名であった。

2　受講者の評価

申込手続きを完了し受講が決定した者に、プログラム開始前とプログラム終了後の 2 回、アンケートを実施した。以下に、その結果を示す。

(1)　受講前アンケート

受講前アンケートは、受講者 17 名中 17 名全員が回答した（回収率 100%）。受講生は全員女子大学生（短大生含む）であり、平均年齢は 19.8 歳だった。

プログラムを知った経緯については、ポスターで知った人が 7 名（41%）、大学 HP で知った人が 4 名（24%）、紹介されたという人が 6 名（35%）であった（図 1）。応募のきっかけは、15 名（88%）が「自己啓発・キャリアアップのため」と回答した（図 2）。

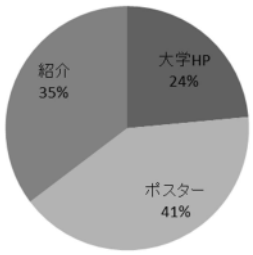

図1.プログラムを知った経緯

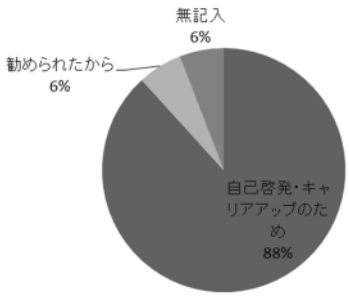

図2.応募のきっかけ

図 3 は、野外活動に関する受講者の経験や知識などを「強く思う」「少し思う」「普通」「あまり思わない」「まったく思わない」という 5 段階評価で求めた結果である。

「野外で活動することは得意な方である」という質問では、「強く思う」「少し思う」が全体の 64.7%と過半数を占めた。また「野外活動の大切さを知っている」でも「強く思う」「少し思う」が全体お 58.8%であった。一方、「野外活動に関する知識や技能を知っている」では「強く思う」が 0 人「少し思う」が 1 人（5.8%）であり、「子どもの野外活動を支援するときに必要な

心構えを身につけている」という質問では、「強く思う」「少し思う」と回答したものが 6 人(35.2%)と、過半数に満たなかった。

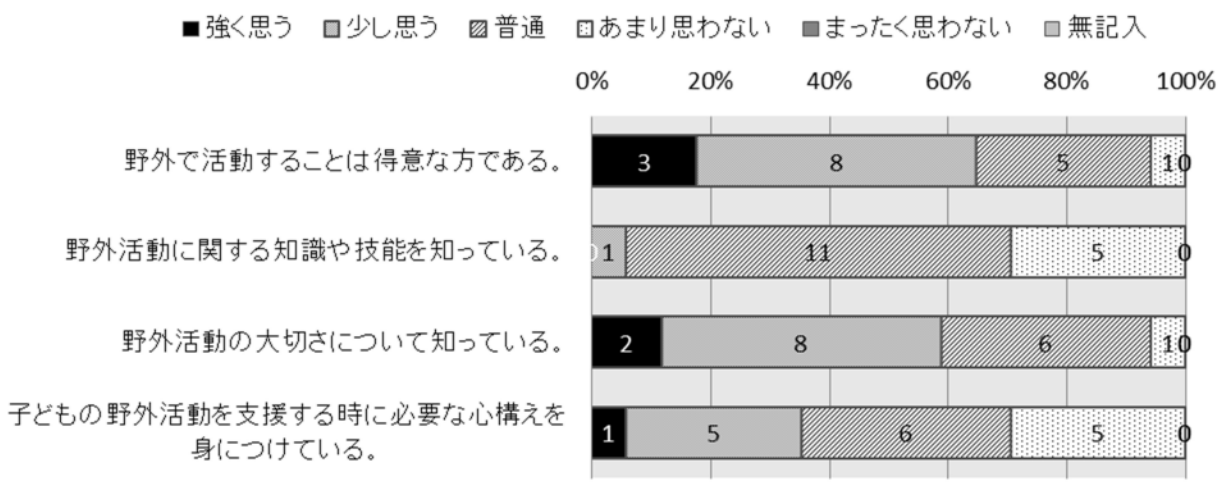

図3.野外活動支援員育成プログラム 事前アンケート結果

「応募のきっかけを詳しくご記入ください」「野外活動の大切さについて知っている」の質問に「強く思う」「少し思う」「ふつう」と答えた方は、「大切であると思う理由についてお聞かせください。」「今回講座を受けようと思った動機をお聞かせください。」「現在、あなたにとって野外活動、及びその支援をする際に、課題となっている点をお聞かせください。」「野外活動のうち、特に野外キャンプ活動について、どのような機会に、どの程度経験したことがあるか、お聞かせください」「今回の講座について期待することなど、ご自由にご記入ください」という 6 つの質問を、自由記述にて回答を求めた。以下にその回答を記載した。

■応募のきっかけを詳しくご記入ください。

・野外キャンプ、遠足等のボランティアに参加したかったから。
・将来、教職に就いた時に、野外での活動が充実したものになれるよう、この講座を受けて、知識や経験値をあげようと考えたため。
・野外での子どもと過ごし方を学びたかったから。
・得意なことがほしいと思ったため。
・野外活動支援員として活躍してみたいと思ったため。将来につながると思ったため。
・野外活動についての経験・知識を持ち子どもたちと接したいと思ったから。
・将来子どもに関わる仕事に就きたいと思っており、ためになると思ったから。
・子どもが大好きで外で身体を動かすことが大好きだから。
・野外活動支援員に興味を持ち、受講したいと思った為。
・自分が保育者になった時に遠足などの行事で役立つと思ったから。
・経験として将来役立つと思ったから。
・野外での活動の支援に興味を持ったから。

■「野外活動の大切さについて知っている」の質問に「強く思う」「少し思う」「ふつう」と答えた方は、大切であると思う理由についてお聞かせください。

・普段とは違って、共同作業が大切であり、コミュニケーションを養えるから。
・自分が昔小さい頃、野外活動（キャンプなど）をやっていて、自分自身よい経験だと感じているため。
・自然の中で活動することでしか発見できないことや、不便さの中で学べるものがあると考えているため。
・自然の中でしか味わえない発見は子どもの興味・関心を引き出すから。
・専門知識は少ないが、野外活動で得られる充足感の大切さは感じている。
・野外活動や仲間と協力することも多いし、限られた道具、環境で過ごすことを知る大切な時間だと思う。
・火をおこしたり自分たちでご飯を考え、作ったりすることは、生きていく上で大切なことであるから。
・普段教室の中で学習することだけでなく、野外でさまざまな経験を通して新しい発見ができると思うから。
・屋内の活動だけでは養われないものもあり、自然に触れ合うなどの完成も大切だと思うから。
・キャンプなどみんなでいっしょに何かをするということはすばらしいことだから。
・自然とふれあう体験は貴重なもので、色々な発見ができるから。
・みんなで協力して行うので協調性が養われ、便利なものが揃っているこの時代に自分たちで１から作り上げて生活するので、物の大切さを感じられる。運動機能の発達を期待できるのではないかと思う。
・自然とかかわったりすることで情緒の安定などプラスな面を養えるから。
・コミュニケーションがとれやすい。
・自分自身が幼い頃自然の中で遊ぶことが多く、その中で危険なことも楽しいことも経験してきた。その分自然の大切さなどを見つめなおす機会となった。
・室内ではわからない新しい気付きや学びがあるし、野外ならではの楽しさがあるから。

■今回講座を受けようと思った動機をお聞かせください。

・何かこれからのためになりそうだと思ったから。
・野外活動に興味があったため。
・将来のために色々な年代な子どもたちとかかわりたいと感じており、小学生とも関わりたく、ボランティアに参加したかったので、この講座を受けようと思いました。
・野外の活動について詳しく学べる講座は、大学の授業の中にはなかったので。また支援員としての活動がしたかったから。
・講師の先生や大学の先生から話を聞くことのできる貴重な機会だから。
・実践的な経験が欲しいと考えたため。
・小学校教員になった時、野外活動もあると思うし、役立つと思ったから。
・小学校教師を目指す上で、役に立つと思ったから。また、自分自身野外活動が好きだから。
・子どもたちと野外活動をすることもあるので、その時に必要な知識・技能を持っていることが大切だと思ったので取った。

・将来子どもに関わる仕事に就きたいと思っており、そのためにも必要だと考えたから。
・野外活動について詳しく知りたくなり、将来役に立ちそうだなと思ったから。
・興味を持ったから。遠外など印率をしてみたいと思ったから。
・将来自分が保育者になった時に子どもたちにどういう支援ができるか、いろんな視点から自分なりに考えるきっかけになると思いました。
・子どもと関わる職業につきたいと思っているので、良い経験になると思ったから。
・野外活動が好きだから。
・野外活動やこどもと自然の関わりについてなどとても興味があり、学んでみたいと思ったから。
・普段の生活では、野外でキャンプをしたり、野外活動を行ったりする機会がないので、大切さを学びたいと思った。

■現在、あなたにとって野外活動、及びその支援をする際に、課題となっている点をお聞かせください。

・野外活動に関しての知識・情報を増やすこと。
・子どもたちの安全確保。
・レクリエーションの種類の少なさ。野外の知識の少なさ。
・専門的な知識がないこと。危険なことにならないために、どんなことに注意して支援すればいいのか。
・危険な植物・昆虫や野外で子どもが傷をした際の処置法を学ぶこと。
・自然に関する知識を身につける。
・まず野外活動での注意点、プログラム、安全性など細かいことを知らない点。
・子どもの数に対して人数の少ない教員がいかに子どもたちの安全を確保するか。
・大人の責任として安全管理や、より活動がたのしくなるような創意工夫。
・野外活動をするあたり、何を注意しなければならなのかまた何のために支援員が必要なのか知りたいから。
・人との交流がしっかりと出来、必要な様々な知識があること。
・今まで、キャンプをしたことがない。知識を学び、実際に挑戦することで身につけていくことが課題。
・同じグループの人々の行動ひとつひとつ認識して、今、自分は何をすべきかを考えることです。
・今まで野外活動等の経験が少ない点。
・技術がない。
・自分自身が半端な知識しか持たないために正しい指導ができないのではないかという恐れがあるため。
・野外活動を行う際、どこが大切でどこを中心に子どもたちに教えてあげなければいけないなどの知識がまだついてないので、つけていきたい。

■野外活動のうち、特に野外キャンプ活動について、どのような機会に、どの程度経験したことがあるか、お聞かせください（なお、経験したことのない方はその旨をお書きください）。

・小学校時、中学、高校での野外活動。
・小学校の時に行った林間学校で外でごはん作りをした程度です。外でキャンプをしたことはありません。
・昔ガールスカウトをやっていたので、その時に野外調理や火おこし、キャンプファイヤーなどやったことがあります。
・小学 5 年生~6 年生まで所属していた地元の野外活動クラブで 3 ヶ月に一度位の経験と、中学 1 年時の活動。
・小学 4～6 年の頃、大学生と市の職員が企画するキャンプに参加したことがある。
・中学 2 年生時に学校の全員参加 2 泊 3 日のキャンプ旅行。
・小学生の頃に自然教室で八ヶ岳（中学生の時も行った。）高校での野外活動。
・小・中・高等学校での活動。大学 1 年のときのボランティア活動で子どもたちと一緒にキャンプへ行き、火をおこして、カレーを作ったり、キャンプファイヤーを行ったりした。
・小学生の時に学校から提示され、2 回程行き、また消防少年団という団体で 2 回、中学生、大学生の時に山寺留学を体験している。
・中学 1 年の時の林間学校。
・小学校や中学校での林間学校や修学旅行、部活動で、野外キャンプ活動を経験しました。
・経験したことがない。
・1 年の時に、基礎体験演習の授業で飯ごうを使ってご飯を作りました。
・学校での自然教室に参加した程度で本格的なキャンプに行ったことはありません。
・習い事で運営をしている。
・小学生の頃、わんぱくキャンプという、NPO 法人のキャンプに参加したり、地元の大学生が連れて行ってくれる野外でのキャンプに参加したりしていた。テント張りから火おこしまで一通り経験したことがある。
・小学校 6 年生の時の臨　学校の時に野外キャンプで、キャンプファイヤーなどをやった。

■今回の講座について期待することなど、ご自由にご記入ください。

・少しでも野外活動についての知識や情報を増やし、この先生かせるようにしたいです。
・自分自身が楽しむ姿勢をもって参加したいと思っています。
・野外活動の新しい知識の獲得、また自分の出来る事を生かすことができたらいいなと思います。よろしくお願いします。
・自分の野外活動のスキルが上がることや、一緒に活動する人達との交流。その後の支援員としての活動。
・授業では学べないじっせん的なことについて学び、引率やキャンプ規格に自身を持って取り組めるようになりたい。
・友人たちとの交流、自然との触れ合いの機会等。
・こどもたちの野外活動で役に立てることを期待する。プログラムを通し、自分自身の知識をつけ、近隣の子どもたちを引率する手助けができるように自信をつけたい。
・キャンプファイヤー楽しみです。どのように支援員が役割を果たしているのか知れると良いと思います。

・小学生や中学生などの野外活動を支援することのできる知識や技能を身につけたいです。
・よろしくお願いします。
・班の先輩方も優しくてとても楽しみです。自分に出来る事を精一杯やります。
・何か自分の自信につながればいいなと思います。
・豆知識なども教えてほしい。
・すごく期待でいっぱいです。自分自身楽しみながら取り組んでいきたいです。
・野外活動での大切なこと、大変なことや辛いこと、すべて知って、これからの学びに生かしたい。

(2) 受講後アンケート

受講者 17 名のうち、受講後アンケートは 16 名が回答した（回収率 94%）。

アンケートでは、講座に関する意見や野外活動に関する知識や関心などを「強く思う」「少し思う」「ふつう」「あまり思わない」「まったく思わない」の 5 段階評価で回答を求めた（図 4）。

「野外で活動することは得意な方である」では、「強く思う」「少し思う」と回答した者が 11 名（68.8%）と回答数は事前アンケートと同数であった。しかし、「今回の講座を通して、子どもにとって野外活動の大切さを知ることができた」「今回の講座では、講義や演習、実習体験を通して、子どもの野外活動の内容を知ることができた」「今回の講座では、神殿の野外活動を支援する際の心構えや知識・技能を知ることができた」という問いでは、それぞれ 16 名（100%）、16 名（100%）、15 名（93.8%）が「強く思う」又は「少し思う」と肯定的な回答をした。

講座の運営に関しても「この講座での教材資料提示は、授業の内容を理解するのに役だった」「この講座での授業は、質問や意見を引き出し、受講者の積極的な参加を促した」「この講座での授業は講師の十分な準備と熱意をもって行われた」の問いに対し、「強く思う」もしくは「少し思う」と回答したものが、それぞれ 15 名（93.8%）、13 名（81.3%）、13 名（81.3%）、16%（100%）と、全体のほとんどを肯定的な回答で占めた。

「以前から、時間が取れれば、保育園・幼稚園・小学校現場に参加したいという気持ちはあった」という問いに対し 13 名（81.3%）が「強く思う」、3 名（18.8%）が「少し思う」と回答していたが、「この講座を受けて、時間が取れれば保健室・幼稚園・小学校現場に野外活動支援員として参加したいという気持ちが強くなった」では 15 名（93.8%）が「強く思う」、1 名（6.2%）が「少し思う」と回答した。さらに「野外活動支援員としての知識や技能を現場で生かしていきたいという気持ちが強くなった」という問では、16 名（100%）が「強く思う」「少し思う」と肯定的な回答をした。

一方、「この講座を受けて、保育園・幼稚園・諸具悪行現場に入っていくことに不安を感じるようになった」という問いでは「少し思う」が 6 名（37.5%）、「あまり思わない」が 6 名（37.5%）と同数の回答であった。

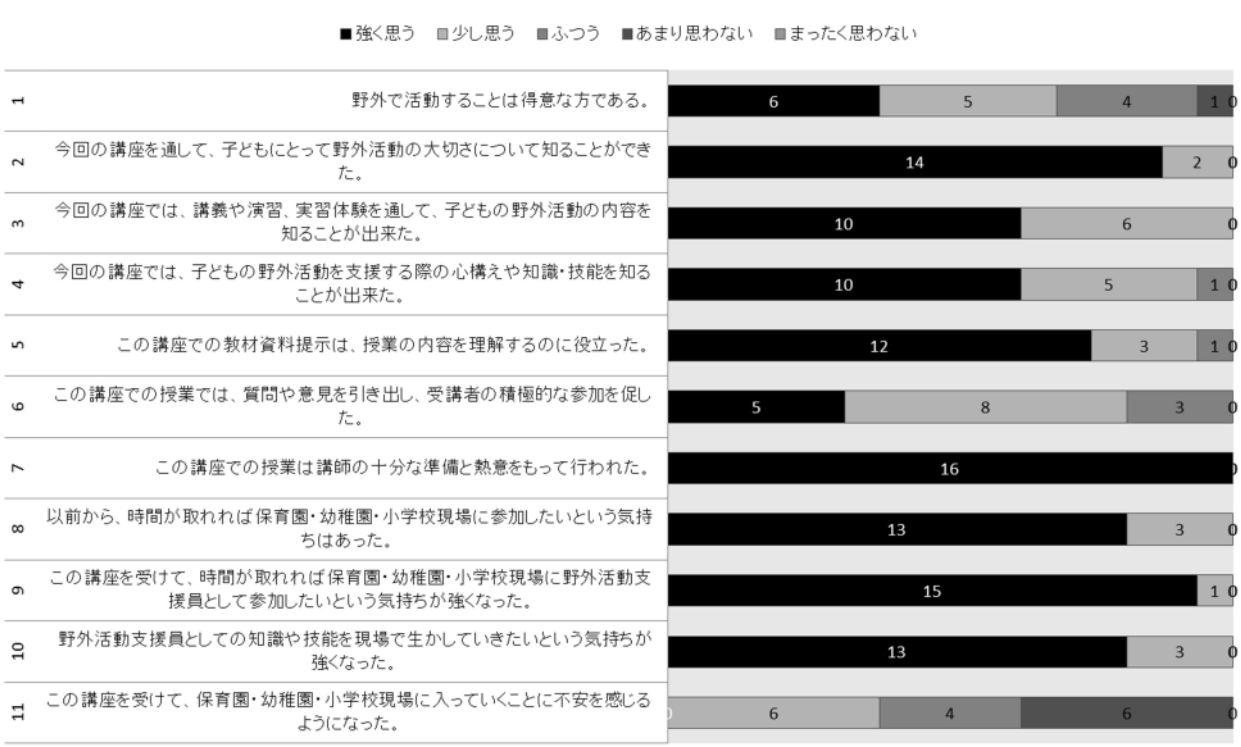

図4. 野外活動支援員育成プログラム 受講後アンケート結果

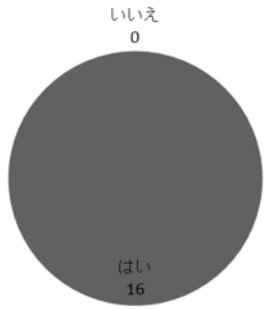

図5. 本プログラムを人に薦めたいですか？

「本プログラムを人に薦めたいですか？」という問では、16 名（100%）が「はい」と回答した（図 5）。

「今回、講座を受けて良かった点はどのようなところですか？」「今回、講座を受けてみて、あなたにとって課題となった点（新たに見つかった課題を含む）はどのようなところですか？」「今回の講座について感想、ご意見、今後に向けてなど、ご自由にご記入下さい。」の 3 つの質問項目については、自由記述で回答が求められ、以下の通り回答が得られた。

■今回、講座を受けて良かった点はどのようなところですか？(現場体験に関する内容も含む、全体として印象に残った内容でも良い)

・野外活動をする上での必要なことを学べた点。野外活動支援員として実際に現場に入り、経験出来た点。
・状況に応じてすばやく判断し、行動に移す点。
・印象に残っている内容は応急処置についてです。現場でも活かせるよう復習したいです。
・授業では気づけなかった環境を作っていく上での注意点を知ることが出来たところ。実戦経験を積むことで自分が先生になった時にスムーズに行うことが出来ると思う。
・救急法など、普段できないことを学ぶことが出来た。
・野外活動をする際に、事前に準備しておくことがたくさんある事が知れて良かった。
・改めてキャンプの楽しさを感じることが出来たところ。
・将来遠足に行くときや野外活動での引率に役立つところ。

・講座で習ったことが現場で多く使えたところです。
・実際に動いて体験するプログラムが多かったため、実践ができた。
・実際にキャンプに行くことで、自分たちで野外活動をつくり上げることができた点。
・実際に自分自身が野外体験をしたことで、子どもたちと野外活動をするイメージがわきやすくなった。
・普段は知ることのできない細かい情報なども教えてくださり、今後の学びに役に立ちました。
・講座の後に現場へ行き、実際に得た知識、心構え等を試すことができたところ。
・実際に外に出て経験することで教師の目線、児童の目線で見ることができよかったと思います。
・実際に外へ出て活動できた事。

■今回、講座を受けてみて、あなたにとって課題となった点（新たに見つかった課題を含む）はどのようなところですか？

・これから野外活動支援員として現場に出向き、学んでいきたい。
・受講している方たちの積極性を感じました。キャンプでもすぐ「はい、私やる」といえていて、刺激を受けたので自分ももっと積極的になりたいです。
・もう少し視野を広げて子どもたちを見守る事が必要だと感じました。
・子どもに関わる人達全員知る必要があると感じた。
・野外にある危険や、それに対応する力をもっと身につけていく必要があると思う。
・プログラムの予定や内容を話し合う際、リーダーとしてなかなか話しを進める動きができなかったところ。
・子どもの安全を確保する技術を身につけたい（危険な場所での配慮など）。
・まだまだ経験不足のため現場で柔軟な対応が上手にできなかったことです。
・子どもの安全管理をするに辺り、知識だけでなく実践する場を持つこと。
・野外活動について色々なことを知ることができたが、実際に子どもといっしょに活動するとなると変わってくることもたくさんあると思うのでもっと配慮すべき点も考えていきたいです。
・室内よりも野外での活動の方がやはり危ない場面が多く（川など）そのような場面で自分はどのような配慮なのか、しっかり考えていかなければならないと思った。
・どこまで吸収できているかわかりませんが、これを実際に教える立場としてうまく伝えられるかが不安です。
・今回講座を受け実際に生かす力。
・自然（草木・虫）に関する知識をより身につけたい。
・安全について無知な所。

■今回の講座について感想、ご意見、今後に向けてなど、ご自由にご記入ください（回数、期日、時間帯についてご意見をください）。

・6 限や土曜日が多くて時間を合わせるのが大変でした。
・講座の回数や時間等はとても良かったと思います。先輩と交流することも出来たし、人といっしょに楽しむという大切な経験もできたので良かったと思います。

・今回の講座は本当に為になりました。実際の活動もとても楽しいので、ぜひ来年も参加したいです。
・後期の活動日程が、もう少し早く分かればいいと感じた。
・理科支援員の講座と何度か重なることがありました。ビデオで補講できるところが良いと思いました。
・回数もちょうどよかったし、様々な活動もあって楽しかった。
・今回短期間でしたが、とても充実した現場でした。子どもたちはもっとたくさん関わりたかったです。
・授業の無い曜日に 6 限だけ授業があったため、日程調整が大変でした。
・野外の活動以外に、治療の仕方なども教えてもらえてすごく良かったです。
・野外活動の大切さなど知ることができ、とても貴重な体験でした。ありがとうございました。
・すごく楽しい講座でした。ありがとうございました。
・全日程無理なく参加することができたと感じます。ありがとうございました。
・野外という視線で子どもをみることが出来て良かった。

6　宿泊を伴う自然体験･野外体験活動を行う意義についての調査研究

1　調査問題の開発

(1)　質問紙の作成

先行研究を基に、宿泊を伴った自然体験活動、野外体験活動を行う意義として、道徳観の形成に価値を見いだしたものが多く見られた。例えば以下のものがあげられる。

・川崎友絵,園田悦代,小学生の「自然体験」と「生活体験」に関する実態調査，小児保健研究,第63巻,第1号,pp.27-29,p23-30,2004.

・統計数理研究所,土屋隆裕,「子どもの体験活動等に関する調査」結果から，社会法人,中央調査社,中央調査報No.504,p1,p2,1999.

・平成11年生涯学習審議会,「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」答申

道徳観の形成に価値をおきながらも、小学校学習指導要領道徳で示されている4つの観点との関連は全くはかられていない。

公立の小学校が教育活動として宿泊を伴う自然体験・野外体験活動を位置づけるためには、小学校学習指導要領の教科等の目標や内容等に示されていることが求められる。

そこで、本調査においては現行の小学校学習指導要領道徳で示された4つの観点に基づき意識調査問題を作成した。

質問紙の作成にあたっては、道徳観については現行の小学校学習指導要領（道徳編）で求めている以下の4つの観点にそって作成を行った。

4つの観点について

「Ⅰ主として自分自身に関すること」

「Ⅱ主として他の人との関わりに関すること」

「Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」

「Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関すること」

道徳観の他に自然体験のみの項目と、自然体験の豊かさから生活体験にも違いがあるのではないかと考え生活体験のみの項目を作成し、体験の程度の違いと道徳の観点に関わる意識の程度との関係を見ることができるようにした。

回答は五段階尺度（いつもしている・ときどきしている・どちらともいえない・ほとんどしていない・していない）で解答者に反応させた。

(2)　予備調査の実施と質問項目の妥当性の検討

作成した調査問題は一度予備調査にかけ、作成した質問項目の統計的な妥当性と内容的な妥当性の検討を行った。統計的な妥当性は、予備調査を本学科学生120人に行い、その得た結果を基に因子分析を行った。また、内容的な妥当性は公立小学校の現役の校長先生に依頼し、作成した質問項目が学習指導要領の内容と整合性がとれたものとなっているのか、小学生でも反応できる質問項目になっているのかを検討してもらった。

なお、予備調査の概要は以下の通りである。

予備調査概要

・調査対象　　都内O女子大学116名（1年生）

・実施時期　　4月

・予備調査の目的　　質問項目の妥当性を検討するため
・質問項目　　「道徳観」に関する全質問項目数 81 項目
・回答者について　（学年・出席番号・性別）

・予備調査質問項目

「Ⅰ主として自分自身に関すること」に関する質問 17 項目

1 朝起こされないで自分で起きる/2 自分のものは自分で片づける/3 自分で計画を立てて勉強する/4 お金を大切に使う/5 学校で宿題が出たら家でやる/6 悪いことをしたら正直に謝る/7 自分のものは大切につかう/8 任された仕事は責任をもっておこなっている/9 何事にも積極的に取り組める/10 自分の意見をはっきり言う/11 弱いものいじめやケンカをやめさせたり注意をしたりする/12 友達が悪いことをしていたらやめさせる/13 道路にゴミが落ちていたら拾う/14 自分の性格の中で悪いところを知っている/15 自分の性格の中で良いところを知っている/16 自分の体調が良いときと悪い時が分かる/17 どんなことでも一生懸命取り組むことができる

「Ⅱ主として他の人との関わりに関すること」に関する質問 16 項目

1 友達に朝の挨拶をする/2 先生に朝の挨拶をする/3 地域の人に朝の挨拶をする/4 家族に朝の挨拶をする/5 家を出る前に「いってきます」という/6 家に帰ったら「ただいま」という/7 寝る前に「おやすみなさい」という/8 誰かに自分が助けてもらったら「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えることができる/9 言葉使いに気をつけようと心がけている/10 友達と仲よくし協力し合える/11 友達が困っていたら助ける/12 友達とゆずりあうことができ/13 男女で協力することができる/14 自分の考えと他者の考えを大切にすることができる/15 自分よりの年下の子の面倒をみることができる/16 お年寄りがこまっていたら助けることができる

「Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」に関する質問 6 項目

1 道に花が咲いていたらふまないようにしている/2 弱い動物をみたら守りたいと思う/3 桜の木をみたらきれいだと思う/4 月を見たらきれいだと思う/5 富士山をみたらきれいだと思う/6 自然を守っていこうと思う

「Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関すること」に関する質問 12 項目

1 すすんで家の手伝いをする/2 みんなで使うものを大切に使っている/3 学校の約束や決まりを守っている/4 家族の大切さを知っている/5 友達の大切を知っている/6 自分たちの住んでいる町の文化や歴史を知っている/7 日本の伝統を知っている/8 日本（人）の良いところを言える/9 他の国の人や文化に興味がある/10 習い事や団体などの集団に入っているまたは入ったことがある/11 学校生活が楽しい/12 係りや委員会などで責任をもって仕事をおこなっている

「５生活体験」に関する質問 16 項目

1 朝食をとること/2 朝顔を洗うこと/3 朝歯を磨くこと/4 雑巾を絞ったこと/5 ナイフや包丁で果物や野菜を切ること/6 ランドセルの中は自分で整理すること/7 自分の下着などを洗濯すること/8 洗濯ものを干すこと/9 汚れた運動靴を自分で洗うこと/10 好き嫌いなく食べられる/11 早寝早起きをしている/12 食品などの買い物にいくこと/13 家の掃除を手伝うこと/
14 食事の準備を手伝うこと/15 食器の片づけを手伝うこと/16 布団のあげおろしやベッドの整理

を自分ですること

「6 自然体験」に関する質問 14 項目

1 海や川で泳いだこと/2 チョウやトンボを捕まえたこと/3 野鳥をみたこと/4 夜空いっぱいの輝く星をゆっくりみたこと/5 ロープウェイやリフトを使わずに歩いて山に登ったこと/6 自分の身長よりも大きい木に登ったこと/7 太陽がのぼるところ、しずむところを見たこと/8 テントで寝たこと 9 スキーをしたこと/10 木の実や野草などを使って遊んだことがある/11 わき水を飲んだこと/12 海、川、池などで魚釣りをしたこと/13 雪を食べたこと/14 外でヘビをみたこと

以上の検討を踏まえて、本調査の質問項目を作成していった。作成された質問項目は、以下の表　の通りである。

表 5.　最終的に作成できた 25 項目の質問項目

25 項目の質問項目
Ⅰ主として自分自身に関すこと
1 私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている
2 私は任された仕事は責任をもっておこなっている
3 私は友達が悪いことをしていたら注意している
4 自分の性格の中で良いところを知っている
5 私はどんなことでも一生懸命に取り組んでいる
Ⅱ主として他の人とのかかわりに関すること
6 誰に対しても挨拶をしている
7 友達と仲よく協力している
8 自分の考えと他者の考えを大切にすることができる
9 誰かの面倒をみている
10 困っている人がいたら助けている
Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること
11 自然を見て感動したことがある
12 自然を守っていこうと思う
Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関すること
13 みんなで使うものを大切に使っている
14 学校の約束や決まりを守っている
15 日本・日本人の良いところを知っている
16 学校が楽しい
生活体験
17 ナイフや包丁で果物や野菜を切ること
18 自分の服を洗濯すること
19 朝、決められた時刻に自分で起きること

20 家の掃除をすること
21 食事の準備や片づけをすること
自然体験
22 木に止まっている野鳥を見つけたこと
23 太陽が昇るところ、しずむところを見たこと
24 木の実や野草などを使って遊んだこと
25 海や川などで魚釣りをしたこと

２　調査結果と結論

(1)　宿泊を伴う活動を行う意義についての調査結果から

自然体験を伴う宿泊行事を第 4、5、6 学年と行っている学校（以下 C 群と呼ぶ）と自然体験を伴う宿泊行事を第 5、6 学年と行っている学校（以下 T 群と呼ぶ）において、作成した質問紙を使って第 4、5、6 学年の児童を対象に調査を行った。

C 群と T 群の生活経験や体験の程度の違いを見るために、第 5、6 学年のみで、生活体験や自然体験の程度を比較した。その結果が以下の表 6 である。

表6　4年から宿泊行事を行う学校と5年から宿泊行事を行う学校の比較（56年）

	体験の程度	学校	度数	平均値	t	df	有意確率（両側）	標準偏差	平均値の標準誤差
56年	生活体験	C	204	2.37	0.07	405	0.94	.912	.064
		T	203	2.36				0.838	.059
	自然体験	C	204	2.77	1.41	392	0.16	1.151	.081
		T	203	2.62				.955	.067
4年	生活体験	C	95	2.23	**(1.39)**	205	0.17	0.754	.077
		T	112	2.37				0.677	.064
	自然体験	C	95	2.35	**(2.64)**	205	0.01	0.918	.094
		T	112	2.71				1.014	.096

C:第4学年から宿泊行事がある学校（C群）
T:第5学年から宿泊行事がある学校（T群）

この表 6 において、**(太数字)**は、T 群よりも C 群の平均値が小さい項目を示す。平均値がより小さいほど、質問項目に肯定的に反応していることを示す。

この表 6 から以下のことが言える。

C 群も T 群いずれの学校も第 5、6 学年を見ると、生活体験も自然体験も大きな差が見られていない。このことから、両群の集団の生活体験や自然体験の程度は同じと言うことができる。また、生活体験に関しては、C 群も T 群も第 4 学年では変わっていない。自然体験だけが T 群よりも C 群が有意に豊かであると言える。このことは、学校での自然体験を伴う宿泊行事を行っている効果であることも推測できる。

そこで、C 群と T 群の第 56 学年の生活体験や自然体験が大きな差がないことがわかったことを踏まえて、道徳観の意識の違いをみた。

はじめに、学校での自然体験を伴う宿泊行事を経験している第 5、6 学年で C 群と T 群で違いが出るかをみたのが表 7 である。

表7　4年から宿泊行事を行う学校と5年から宿泊行事を行う学校の比較（56年）

			度数	平均値	t	df	有意確率（両側）	標準偏差	平均値の標準誤差
Ⅰ主として自分自身に関すること	1私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている	C	204	2.11	3.00	405	0.00	.900	.063
		T	203	1.85				0.849	.060
	2私は任された仕事は責任をもっておこなっている	C	204	1.88	1.73	404	0.08	.798	.056
		T	202	1.75				.773	.054
	3私は友達が悪いことをしていたら注意している	C	202	2.30	**(1.74)**	403	0.08	0.877	.062
		T	203	2.46				0.924	.065
	4自分の性格の中で良いところを知っている	C	204	2.40	**(2.95)**	405	0.00	1.081	.076
		T	203	2.72				1.088	.076
	5私はどんなことでも一生懸命に取り組んでいる	C	202	2.02	**(0.35)**	401	0.72	.849	.060
		T	201	2.05				.856	.060
Ⅱ主として他の人とのかかわりに関すること	6誰に対しても挨拶をしている	C	204	1.73	**(3.47)**	404	0.00	.998	.070
		T	202	2.06				.941	.066
	7友達と仲よく協力している	C	204	1.81	2.85	405	0.00	.914	.064
		T	203	1.57				.757	.053
	8自分の考えと他者の考えを大切にすることができる	C	202	2.09	0.84	402	0.40	.910	.064
		T	202	2.01				.867	.061
	9誰かの面倒をみている	C	200	2.13	**(3.11)**	399	0.00	1.223	.087
		T	201	2.51				1.237	.087
	10困っている人がいたら助けている	C	201	2.16	**(0.75)**	402	0.46	.946	.067
		T	203	2.23				0.866	.061
Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	11自然を見て感動したことがある	C	203	2.08	**(2.22)**	400	0.03	1.212	.085
		T	203	2.36				1.336	.094
	12自然を守っていこうと思う	C	203	1.82	**(0.60)**	403	0.55	.938	.066
		T	202	1.88				1.025	.072
Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関すること	13みんなで使うものを大切に使っている	C	203	1.75	3.22	391	0.00	.889	.062
		T	203	1.49				.740	.052
	14学校の約束や決まりを守っている	C	204	1.98	0.30	404	0.76	.885	.062
		T	202	1.95				.790	.056
	15日本・日本人の良いところを知っている	C	204	1.91	**(0.83)**	403	0.40	1.134	.079
		T	201	2.00				0.987	.070
	16学校が楽しい	C	204	2.04	**(0.00)**	405	1.00	1.150	.081
		T	203	2.04				1.131	.079

C:第4学年から宿泊行事がある学校（C群）
T:第5学年から宿泊行事がある学校（T群）

この表 7 において、(**太数字**)は、T 群よりも C 群の平均値が小さい項目を示す。平均値がより小さいほど、質問項目に肯定的に反応していることを示す。

この表 7 から以下のことが言える。

道徳観に関するⅠ主として自分自身に関することの「1 私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている」、「4 自分の性格の中でよいところを知っている」、Ⅱ主として他とのかかわりに関することの「6 誰に対しても挨拶ができる」、「7 友達と仲良く協力できる」、「9 誰かの面倒を見ている」、Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関することの「11 自然を見て感動したことがある」、Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関することの「13 みんなで使うものを大切に使っている」に C 群と T 群とで統計的な有意な差が見られた。そこで、有意な差が見られた項目について C 群、T 群でいずれの平均値が低いかを見たところ、以下のことが言えた。

Ⅰ主として自分自身に関することは、「1 私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている。」は T 群、「4 自分の性格の中でよいところを知っている。」は C 群であった。Ⅱ主として他とのかかわりに関することの「6 誰に対しても挨拶ができる」と「9 誰かの面倒を見ている。」は C 群、「7 友達と仲良く協力できる。」は T 群であった。Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関することの「11 自然を見て感動したことがある。」は C 群であった。Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関することの「13 みんなで使うものを大切に使っている。」T 群であった。

質問項目によって、有意に平均値が低い項目が分かれた。このことは、第 56 学年を比較すると、項目によって C 群と T 群とで違いが見られたものの道徳観の意識の程度はほぼ同じと考えることができる。そこで、第 4 学年段階で自然体験を伴った宿泊行事を行っている C 群と第 4 学年で自然

体験を伴う宿泊行事を行っていないＴ群のそれぞれの第４学年のみで比較を行った。その結果が表８である。

表8　4年から宿泊行事を行う学校と5年から宿泊行事を行う学校の比較（4年）

			度数	平均値	t	df	有意確率（両側）	標準偏差	平均値の標準誤差
Ⅰ主として自分自身に関すること	1私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている	C	95	1.76	1.92	205	0.06	.768	.079
		T	112	1.56				0.695	.066
	2私は任された仕事は責任をもっておこなっている	C	95	1.60	0.56	205	0.58	.764	.078
		T	112	1.54				.656	.062
	3私は友達が悪いことをしていたら注意している	C	95	1.87	**(2.95)**	205	0.00	0.854	.088
		T	112	2.27				1.040	.098
	4自分の性格の中で良いところを知っている	C	95	2.17	**(3.98)**	205	0.00	1.117	.115
		T	112	2.80				1.169	.110
	5私はどんなことでも一生懸命に取り組んでいる	C	95	1.75	**(1.62)**	205	0.11	.899	.092
		T	112	1.96				.934	.088
Ⅱ主として他の人とのかかわりに関すること	6誰に対しても挨拶をしている	C	95	1.33	**(5.56)**	187	0.00	.626	.064
		T	112	1.97				1.026	.097
	7友達と仲よく協力している	C	95	1.53	0.54	205	0.59	.682	.070
		T	112	1.47				.735	.069
	8自分の考えと他者の考えを大切にすることができる	C	95	1.68	**(2.35)**	203	0.02	.802	.082
		T	110	1.97				.933	.089
	9誰かの面倒をみている	C	95	2.05	**(0.75)**	205	0.45	1.332	.137
		T	112	2.19				1.249	.118
	10困っている人がいたら助けている	C	94	1.87	**(1.27)**	204	0.21	.930	.096
		T	112	2.04				0.910	.086
Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	11自然を見て感動したことがある	C	95	1.61	**(4.12)**	205	0.00	1.104	.113
		T	112	2.29				1.233	.117
	12自然を守っていこうと思う	C	94	1.45	**(2.19)**	201	0.03	.784	.081
		T	109	1.70				.833	.080
Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関すること	13みんなで使うものを大切に使っている	C	95	1.44	1.65	186	0.10	.725	.074
		T	112	1.29				.621	.059
	14学校の約束や決まりを守っている	C	95	1.61	**(0.86)**	204	0.39	.704	.072
		T	111	1.70				.816	.077
	15日本・日本人の良いところを知っている	C	94	2.13	**(1.25)**	203	0.21	1.255	.129
		T	111	2.34				1.195	.113
	16学校が楽しい	C	94	1.70	**(2.89)**	199	0.00	0.827	.085
		T	111	2.10				1.136	.108

C:第4学年から宿泊行事がある学校（C群）
T:第5学年から宿泊行事がある学校（T群）

この表８においても、**(太数字)**は、Ｔ群よりもＣ群の平均値が小さい項目を示す。平均値がより小さいほど、質問項目に肯定的に反応していることを示す。

この表８から以下のことが言える。

道徳観に関するＩ主として自分自身に関することの「1 私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている。」、「3 私は友達が悪いことをしていたら注意している」、「4 自分の性格の中でよいところを知っている。」。Ⅱ主として他とのかかわりに関することの「6 誰に対しても挨拶ができる」、「8 自分の考えと他者の考えを大切にすることができる。」。Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関することの「11 自然を見て感動したことがある。」、「12 自然を守っていこうと思う。」。Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関することの「16 学校が楽しい。」にＣ群とＴ群とで統計的な有意な差が見られた。そこで、有意な差が見られた項目についてＣ群、Ｔ群でいずれの平均値が低いかを見たところ、以下のことが言えた。

Ｉ主として自分自身に関することの「1 私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている。」は、Ｔ群が有意に低かった。以下、Ｉ主として自分自身に関することの「3 私は友達が悪いことをしていたら注意している」、「4 自分の性格の中でよいところを知っている。」、Ⅱ主として他とのかかわりに関することの「6 誰に対しても挨拶ができる」、「8 自分の考えと他者の考えを大切にすることができる。」、Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関することの「11 自然を見て感動したことがある。」、「12 自然を守っていこうと思う。」、Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関すること

の「16 学校が楽しい。」のすべてが C 群が T 群に比べて有意に平均値が低かった。このことから、C 群は T 群に比べて多くの項目でそう思うと考えていることが言える。

以上の結果から、第 5、6 学年になると大きな差が見られない C 群と T 群であったが、自然体験を伴う宿泊行事を行った第 4 学年でまだ、第 4 学年ではそうした行事を行っていない第 4 学年では、ⅠからⅣのすべての道徳的価値項目に関する有意な差が見られた。

両群の違いを自然体験を伴う宿泊行事の有無だけで結論を導くよりも、もう少し複数の要因を考える必要はある。しかし、宿泊行事を終えた 5、6 年で見ると差が出ないことから考えると宿泊行事の有無は大きな影響の一つとも考えられる。

(2)　自然体験･生活体験の豊かさと道徳観

次に、自然体験や生活体験の豊かさの違いが、これまで述べてきた道徳観の違いとして出てくるのかを、C 群と T 群をあわせた子どもを対象にみた。

自然体験と生活体験の程度を聞いた質問項目は、以下の通りである。

自然体験の質問項目について

★22 木に止まっている野鳥を見つけたこと

★23 太陽が昇るところ、しずむところを見たこと

★24 木の実や野草などを使って遊んだこと

★25 海や川などで魚釣りをしたこと

生活体験の項目について

★17 ナイフや包丁で果物や野菜を切ること

★18 自分の服を洗濯すること

★19 朝、決められた時刻に自分で起きること

★20 家の掃除をすること

★21 食事の準備や片づけをすること

以上の質問項目の反応に対して、自然体験 4 項目、生活体験 5 項目の平均値を算出した。数値は、「1：いつもしている　2：ときどきしている　3：どちらともいえない　4：ほとんどしていない　5：していない」である。算出した平均値の、1.5 未満を自然体験や生活体験が豊かな子どもとし 1.5 以上を自然体験や生活体験が少ない子どもとして扱った。

生活体験が豊かな子どもと生活体験が少ない子どもで道徳観に違いがあるのかを見たのが表 9 である。

表9　生活体験の豊かさによる比較（456年3校）

			度数	平均値	t	df	有意確率（両側）	標準偏差	平均値の標準誤差
Ⅰ主として自分自身に関すこと	1私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている	生活体験豊か	88	1.56	(3.79)	612	0.00	.676	.072
		生活体験少ない	526	1.92				0.865	.038
	2私は任された仕事は責任をもっておこなっている	生活体験豊か	87	1.43	(4.07)	611	0.00	.622	.067
		生活体験少ない	526	1.78				.780	.034
	3私は友達が悪いことをしていたら注意している	生活体験豊か	87	1.99	(3.31)	121	0.00	0.883	.095
		生活体験少ない	525	2.33				0.939	.041
	4自分の性格の中で良いところを知っている	生活体験豊か	88	1.86	(7.92)	149	0.00	0.819	.087
		生活体験少ない	526	2.66				1.130	.049
	5私はどんなことでも一生懸命に取り組んでいる	生活体験豊か	87	1.51	(5.55)	608	0.00	.680	.073
		生活体験少ない	523	2.06				.884	.039
Ⅱ主として他の人とのかかわりに関すること	6誰に対しても挨拶をしている	生活体験豊か	88	1.42	(6.05)	180	0.00	.601	.064
		生活体験少ない	525	1.89				1.002	.044
	7友達と仲よく協力している	生活体験豊か	88	1.31	(4.99)	145	0.00	.613	.065
		生活体験少ない	526	1.68				.824	.036
	8自分の考えと他者の考えを大切にすることができる	生活体験豊か	88	1.49	(7.12)	148	0.00	.661	.070
		生活体験少ない	521	2.06				.900	.039
	9誰かの面倒をみている	生活体験豊か	88	1.61	(6.91)	161	0.00	0.863	.092
		生活体験少ない	520	2.36				1.286	.056
	10困っている人がいたら助けている	生活体験豊か	88	1.67	(5.01)	608	0.00	.690	.074
		生活体験少ない	522	2.19				0.930	.041
Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	11自然を見て感動したことがある	生活体験豊か	88	1.49	(6.90)	157	0.00	.884	.094
		生活体験少ない	525	2.25				1.288	.056
	12自然を守っていこうと思う	生活体験豊か	88	1.39	(4.52)	129	0.00	.823	.088
		生活体験少ない	520	1.83				.943	.041
Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関すること	13みんなで使うものを大切に使っている	生活体験豊か	88	1.24	(5.71)	198	0.00	.455	.048
		生活体験少ない	525	1.58				.822	.036
	14学校の約束や決まりを守っている	生活体験豊か	88	1.58	(3.49)	610	0.00	.690	.074
		生活体験少ない	524	1.91				.838	.037
	15日本・日本人の良いところを知っている	生活体験豊か	88	1.55	(6.27)	169	0.00	.741	.079
		生活体験少ない	522	2.13				1.160	.051
	16学校が楽しい	生活体験豊か	88	1.47	(5.91)	138	0.00	0.883	.094
		生活体験少ない	524	2.09				1.111	.049

この表 9 においても、(**太数字**)は、生活体験が少ない子どもよりも生活体験が豊かな子どもの平均値が小さい項目を示す。平均値がより小さいほど、質問項目に肯定的に反応していることを示す。

この表 9 から以下のことが言える。

道徳観に関するⅠ主として自分自身に関することの全項目、Ⅱ主として他とのかかわりに関することの全項目、Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関することの全項目、Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関することの全項目で、生活体験が豊かな子どもと生活体験が少ない子どもとで統計的な有意な差が見られた。そこで、有意な差が見られた項目について C 群、T 群でいずれの平均値が低いかを見たところ、以下のことが言えた。

Ⅰ主として自分自身に関すること、Ⅱ主として他とのかかわりに関すること、Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること、Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関することのすべての質問項目で生活体験が豊かな子どもは生活体験が少ない子どもに比べて有意に平均値が低かった。このことから、生活体験が豊かな子どもは生活体験が少ない子どもにすべての項目でそう思うと考えていること多いと言える。

自然体験が豊かな子どもと自然体験が少ない子どもで道徳観に違いがあるのかを見たのが表 10 である。

表10　自然体験の豊かさによる比較（456年3校）

			度数	平均値	t	df	有意確率（両側）	標準偏差	平均値の標準誤差
Ⅰ主として自分自身に関すること	1私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている	自然体験豊か	112	1.64	**(3.17)**	612	0.00	.746	.070
		自然体験少ない	502	1.92				0.864	.039
	2私は任された仕事は責任をもっておこなっている	自然体験豊か	111	1.54	**(2.92)**	611	0.00	.748	.071
		自然体験少ない	502	1.77				.768	.034
	3私は友達が悪いことをしていたら注意している	自然体験豊か	112	2.04	**(3.14)**	168	0.00	0.910	.086
		自然体験少ない	500	2.34				0.936	.042
	4自分の性格の中で良いところを知っている	自然体験豊か	112	2.11	**(4.62)**	612	0.00	1.093	.103
		自然体験少ない	502	2.64				1.110	.050
	5私はどんなことでも一生懸命に取り組んでいる	自然体験豊か	111	1.70	**(3.69)**	608	0.00	.734	.070
		自然体験少ない	499	2.04				.898	.040
Ⅱ主として他の人とのかかわりに関すること	6誰に対しても挨拶をしている	自然体験豊か	112	1.69	**(1.63)**	611	0.10	.860	.081
		自然体験少ない	501	1.85				.989	.044
	7友達と仲よく協力している	自然体験豊か	112	1.42	**(3.45)**	196	0.00	.666	.063
		自然体験少ない	502	1.67				.830	.037
	8自分の考えと他者の考えを大切にすることができる	自然体験豊か	111	1.73	**(3.30)**	607	0.00	.841	.080
		自然体験少ない	498	2.04				.894	.040
	9誰かの面倒をみている	自然体験豊か	112	1.85	**(4.23)**	189	0.00	1.076	.102
		自然体験少ない	496	2.34				1.282	.058
	10困っている人がいたら助けている	自然体験豊か	112	1.79	**(4.14)**	608	0.00	.807	.076
		自然体験少ない	498	2.19				0.925	.041
Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	11自然を見て感動したことがある	自然体験豊か	112	1.50	**(7.58)**			.900	.085
		自然体験少ない	501	2.28		226	0.00	1.292	.058
	12自然を守っていこうと思う	自然体験豊か	112	1.35	**(6.54)**			.681	.064
		自然体験少ない	496	1.85		224	0.00	.964	.043
Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関すること	13みんなで使うものを大切に使っている	自然体験豊か	112	1.31	**(3.88)**	203	0.00	.630	.060
		自然体験少ない	501	1.58				.812	.036
	14学校の約束や決まりを守っている	自然体験豊か	111	1.81	**(0.71)**	610	0.48	.781	.074
		自然体験少ない	501	1.87				.836	.037
	15日本・日本人の良いところを知っている	自然体験豊か	110	1.65	**(4.11)**	610	0.00	.990	.094
		自然体験少ない	500	2.14				1.138	.051
	16学校が楽しい	自然体験豊か	112	1.71	**(3.17)**	610	0.00	0.955	.090
		自然体験少ない	500	2.07				1.123	.050

この表 10 においても、(**太数字**)は、生活体験が少ない子どもよりも生活体験が豊かな子どもの平均値が小さい項目を示す。平均値がより小さいほど、質問項目に肯定的に反応していることを示す。

この表 10 から以下のことが言える。

道徳観に関するⅠ主として自分自身に関することの全項目、Ⅱ主として他とのかかわりに関することの「7 友達と仲良く協力している」、「8 自分の考えと他者の考えを大切にすることができる。」、「9 誰かの面倒を見ている。」、「10 困っている人がいたら助けている。」の項目、Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関することの全項目、Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関することの「13 みんなで使う物を大切に使っている。」、「15 日本･日本人の良いところを知っている。」、「16 学校が楽しい。」の項目で、自然体験が豊かな子どもと自然体験が少ない子どもとで統計的な有意な差が見られた。そこで、有意な差が見られた項目について C 群、T 群でいずれの平均値が低いかを見たところ、以下のことが言えた。

有意な差が見られた、Ⅰ主として自分自身に関すること、Ⅱ主として他とのかかわりに関すること、Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること、Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関することのすべての質問項目で自然体験が豊かな子どもは自然体験が少ない子どもに比べて有意に平均値が低かった。このことから、自然体験が豊かな子どもは自然体験が少ない子どもに有意な差が見られたすべての項目でそう思うと考えている子どもが多いと言える。

以上の結果から、自然体験や生活体験が豊かな子どもほど、Ⅰ主として自分自身に関すること、Ⅱ主として他とのかかわりに関すること、Ⅲ主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること、Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関することの道徳的な価値項目すべてで有意に高いということが言える。そのことは、自然体験や生活体験を豊かに持った子どもは、道徳観が高いと言える。

なお、本調査問題開発に当たっては、平成 25 年度大妻女子大学児童学科児童教育専攻 4 年の佐藤美幸さんと共同で研究を進めたことをここに記す。

7　宿泊を伴う自然体験･野外体験活動プログラムの開発と実施

1　活動のねらいと概要

宿泊を伴う自然体験活動を行うことや自然体験や生活体験が豊かな子どもほど道徳観を高く持っているという結果がでた。また、千代田区周辺の公立小学校における学力調査において他教科に比べて理科が低い結果が出た。これらの結果を踏まえて、宿泊を伴った理科的な内容を濃く出した宿泊を伴う自然体験･野外体験活動プログラムを以下の様に作成した。

ねらい：星･天体と昆虫をテーマに、観察する力を養います。子どもたちが講師と共に自然観察方法を学び、観察のポイントをつかむことによって、自分の力で考え、自宅や色々な場所での観察ができる能力を育てていきます。活動は 1 泊 2 日の高原での観察となります。

対　象：小学校 4 年生以上　30 名
応募多数の場合には抽選となります。

参加費：一人 10,000 円　（宿泊代・食費と資料代・標本箱代として）

開催日：

2013 年 8 月 5 日（月）　16 時 30 分～17 時 30 分　大妻女子大学にて説明会開催と集金

2013 年 8 月 25 日（日）～8 月 26 日（月）　1 泊 2 日

活動場所：山梨県清里・野辺山高原、国立天文台野辺山

宿泊は　ペンションスケッチブック

〒407-0301 山梨県北杜市高根町清里 3466-238　0551-48-3337

活動内容：清里高原に住む昆虫を調べる、高原での星空観察（天の川や夏の星座）、夜に活動する昆虫を調べる、国立天文台野辺山見学

2013 年 9 月 14 日（土）17：00～18：00

活動場所：大妻女子大学

活動内容：標本整理・標本の返却・今後の活動をどのように行うかについて

2　企画スケジュール

(1)　8 月 5 日の説明会

8 月 25 日･26 日の一泊二日で行われた宿泊を伴う自然体験･野外活動の具体的なスケジュールや持ち物などについて詳細な説明を行うとともに、子ども同士の顔合わせを行った。

(2)　8 月 25 日･26 日の宿泊を伴う自然体験･野外活動

8 月 25 日

8 時集合　科学技術館前

8:30　　科学技術館　出発　　談合坂 SA で休憩

11:30　　八ヶ岳ふれあい公園

12:00　　お昼ごはん

13:00　　昆虫観察と採集　　14:20 集合

15:30　　八ヶ岳ふれあい公園出発
16:30　　ペンション着
自由時間　スタッフは、標本つくり準備
18:30　　夕ごはん
19:20　　金星の観察
20:00～21:15　　観察開始(班で活動)
21:30～22:30　　標本つくり
22:30～23:00　　自由選択観察活動
23:30　消灯
8 月 26 日
7:00　起床
8:00　朝ごはん
8:30～9:15　太陽観察
9:20　荷物積み込み
9:30　ペンション出発！
10:00　国立天文台野辺山観測所
11:30　お昼ごはん（雨天時バスの中）
（アンケートの記入）
13:45　出発

17:00　到着・解散
科学技術館前にて解散　（17 時頃から児童臨床研究センターのスタッフが科学技術館入り口に待機）

(3)　9 月 14 日

17 時から 18 時

宿泊を伴う自然体験･野外活動の際に作成した昆虫標本を返却した。(作成後、大妻女子大学の児童学科の研究室にて防虫剤をいれ、冷暗乾燥したところにおいて乾燥させておいた。)

標本返却を行う際には、自分で展翅板や展足板から外す作業を子どもが自ら行った。慎重に行わないとせっかくきれいにできた標本が壊れてしまう。

標本の返却後に、今後どの様に標本を保管して行くのか、昆虫標本を作製する際の留意点などを説明した。

3　成果と課題

(1)　組織･体制　ここだからできる体制

①　組織･体制

今回のプログラム開発並びに、運営に関しては以下の組織･体制で取り組んだ。

プログラムの開発と実際に運営には、石井雅幸(大妻女子大学)、木村かおる(科学技術館)、加藤悦雄(大妻女子大学)があたった。石井は、行事全般並びに昆虫関係の企画を行う。木村は、天体関係の企画を行う。加藤は、支援員との連携に関する企画を行う。

事務運営面並びに諸連絡は、児童臨床研究センターの田代亜希、守屋宏美、鈴木智砂子が担当した。具体的には、関係機関・参加者等への連絡、申し込み等の手続き、会計業務、保険等の取り扱い、

物品の発注、プログラム実施中の連絡等にあたった。

これらの業務は、いずれも円滑に進行し、今後の活動を継続していく上での方法論を導きだすことができた。

② 児童臨床研究センターだからできる取り組み

本センターでは、理科支援員育成や野外活動支援員育成の事業を行ってきた経緯があること。また、理科教育を専門とする大妻女子大学家政学部児童学科と兼任するスタッフがいること。長年にわたって科学技術館と連携した取り組みを行ってきた経緯もある。

これらを鑑みたとき、本センターだからこそできる子どもの心をとらえ、子どもへの教育的な価値ある自然体験・野外活動を企画することができるといえる。ある意味では、より理科や自然事象に興味・関心が高い子どもを対象としたプログラムを企画開発することができる。今後、理科だけでなくあらゆる可能性の開発も模索していきたい。

(2) 活動事前・事後調査結果から

宿泊を伴った自然体験・野外活動を計画・実施しての評価を参加した子どもへ行った調査問題並びに参加した子どもへの自由記述をもとに、道徳観、理科への意識並びに企画全体への評価を行う。

① 宿泊を伴った自然体験・野外活動前後の道徳観からの事業評価

今回の事業全体の中で作成した道徳観に基づく意識調査問題をもとに評価を行った。

その結果が表 11 である。

表11 宿泊を伴った自然体験・野外活動前後の道徳観について

			平均値	度数	とてもそう思う	そう思う	どちらとも言えない	思わない	全く思わない	標準偏差	平均値の標準誤差	カイ二乗値	確率	自由度
Ⅰ主として自分自身に関すること	1私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている	事前	1.67	30	15	11	3	1		.802	.146	0.56	0.76	2
		事後	1.80	30	16	8	4		2	1.126	.206			
	2私は任された仕事は責任をもっておこなっている	事前	1.57	28	13	14	1			.573	.108	1.95	0.38	2
		事後	1.61	28	15	11	3	1		.786	.149			
	3私は友達が悪いことをしていたら注意している	事前	2.00	29	10	15	2	2	1	1.000	.186	1.66	0.44	2
		事後	2.14	29	7	15	5		2	1.026	.190			
	4自分の性格の中で良いところを知っている	事前	1.89	28	12	11	2	2	1	1.066	.201	2.24	0.33	2
		事後	1.82	28	14	10	5		1	.983	.186			
	5私はどんなことでも一生懸命に取り組んでいる	事前	1.53	30	15	14	1			.571	.104	1.02	0.31	2
		事後	1.30	30	21	9				.466	.085			
Ⅱ主として他の人とのかかわりに関すること	6誰に対しても挨拶をしている	事前	1.48	29	17	10	2			.634	.118	2.00	0.37	2
		事後	1.76	29	15	11	2	1	1	.988	.183			
	7友達と仲よく協力している	事前	1.30	30	22	7	1			.535	.098	1.02	0.31	2
		事後	1.30	30	21	9				.466	.085			
	8自分の考えと他者の考えを大切にすることができる	事前	1.70	30	14	13	2		1	.877	.160	0.61	0.74	2
		事後	1.77	30	14	11	3	2		.898	.164			
	9誰かの面倒をみている	事前	1.90	30	13	10	5	1	1	1.029	.188	1.38	0.5	2
		事後	2.30	30	7	12	7	3	1	1.055	.193			
	10困っている人がいたら助けている	事前	1.77	30	13	13	3		1	.898	.164	1.83	0.4	2
		事後	2.23	30	7	15	5		3	1.135	.207			
Ⅲ主として自然の崇高なものとのかかわりに関するこ	11自然を見て感動したことがある	事前	1.43	30	22	5	2		1	.898	.164	2.07	0.36	2
		事後	1.33	30	23	6			1	.802	.146			
	12自然を守っていこうと思う	事前	1.07	30	28	2				.254	.046	1.01	0.31	2
		事後	1.23	30	24	5	1			.504	.092			
Ⅳ主として集団や社会とのかかわりに関すること	13みんなで使うものを大切に使っている	事前	1.23	30	23	7				.430	.079	2.07	0.15	2
		事後	1.57	30	15	13	2			.626	.114			
	14学校の約束や決まりを守っている	事前	1.47	30	16	14				.507	.093	3.16	0.08	2
		事後	1.53	30	17	10	3			.681	.124			
	15日本・日本人の良いところを知っている	事前	1.59	29	18	8	1	1	1	.983	.182	1.06	0.59	2
		事後	1.83	29	18	6	2	2	2	1.256	.233			
	16学校が楽しい	事前	1.60	30	20	6	2		2	1.102	.201	0.74	0.69	2
		事後	1.40	30	22	6	1		1	.855	.156			

表 11 では、16 の質問項目それぞれを事業を行う前と後に参加した子どもに反応させた結果である。平均値は、各質問項目をそれぞれ「1 とてもそう思う、2 そう思う、3 どちらとも言えない、4 思わない、5 全く思わない」の 5 件法で反応させた。その尺度を 1 から 5 の等間隔の尺度と考え平均値を算出した。また、各尺度に反応した人数をしめしている。また、カイ二乗検定は以下の手続

きで行った。

5 つの尺度を、「1 とてもそう思う」と「2 そう思う」を肯定的な反応、「3 どちらとも言えない」をそのまま「どちらとも言えない」、「4 そう思わない」と「5 全く思わない」を否定的な反応として『肯定』『どちらとも言えない』『否定』の 3 件に圧縮できると考え圧縮を図った。この 3 件で圧縮した人数分布に事前と事業後に統計的な有意な差があるかないかを見ていった。その結果がカイ二乗値、自由度、そして事前と事後が同じになる確率を示している。

この表 11 から以下のことが言える。

いずれの質問項目に対しても統計的な有意な差は事前と事後で見られなかった。ちなみに、事前と事後で平均値の差の検定を行った際にも有意な差は見られなかった。道徳観の意識の変化は、事業の実施前後では見られなかったといえる。

② 宿泊を伴った自然体験･野外活動の事前事後理科への意識調査を通しての事業評価

①と同様に、理科への意識調査を事業前と事業後に行った。理科の意識調査は、事前と事後で異なった質問を行った。

表12 宿泊を伴った自然体験･野外活動前後の理科についての意識について

番号	質問項目		5とてもそう思う	4そう思う	3どちらとも言えない	2あまり思わない	1まったく思わない	カイ二乗値	確率	自由度
2	3年の頃から理科の勉強は好きだった。	事前	19	5	5	1	0			
1	今、理科の勉強が好き。	事前	21	6	2	1	0	0.441	0.8	2
1	今回のキャンプに参加して、理科の勉強をもっとやりたくなった。	事後	19	5	2	1	1			
6	今回のキャンプに参加して、科学の勉強をもっと行いたくなった	事後	21	6	0	2	1	2.45	0.29	2
7	今回のキャンプに参加する前から、科学の勉強をしたいと思っていた	事後	17	6	2	3	1			
3	理科の勉強では、観察や実験を行うことが好き。	事前	22	5	2	1	0			
4	理科の勉強では、予想や仮説を立てることが好き。	事前	11	11	4	3	1			
5	理科の勉強では、結論をまとめるのが好き。	事前	11	5	9	2	2			
7	植物を育てることが好きだ。	事前	23	3	2	0	2			
6	昆虫や小さな生き物を育てることが好きだ。	事前	22	4	1	0	3	0.86	0.65	2
3	今回のキャンプに参加して、昆虫や生き物のことを勉強したくなった。	事後	24	1	4	1	0			
8	月や星を数時間観察を続けたことがある。	事前	17	5	3	3	2			
9	月や星を観察することは好きだ。	事前	16	5	6	2	1	2.73	0.26	2
2	今回のキャンプに参加して、天体のことを勉強したくなった。	事後	14	12	2	1	1			
10	今回のキャンプ活動は楽しみだ。	事前	26	4	0	0	0	1.05	0.31	1
8	今回のキャンプ活動は楽しかった。	事後	26	2	0	1	0			
4	今回のキャンプに参加して、新しいお友達ができた。	事後	25	3	2	0	0			
5	今回のキャンプに参加して、学校に早く行きたくなった	事後	9	11	5	2	2			

事前には、以下の質問を行った。

1　今、理科の勉強が好き。

2　3 年の頃から理科の勉強は好きだった。

3　理科の勉強では、観察や実験を行うことが好き。

4　理科の勉強では、予想や仮説を立てることが好き。

5　理科の勉強では、結論をまとめるのが好き。

6　昆虫や小さな生き物を育てることが好きだ。

6　植物を育てることが好きだ。

7　月や星を数時間観察を続けたことがある。

8　月や星を観察することは好きだ。

9　今回のキャンプ活動は楽しみだ。

事後には、以下の質問を行った。

1　今回のキャンプに参加して、理科の勉強をもっとやりたくなった。
2　今回のキャンプに参加して、天体のことを勉強したくなった。
3　今回のキャンプに参加して、昆虫や生き物のことを勉強したくなった。
4　今回のキャンプに参加して、新しいお友達ができた。
5　今回のキャンプに参加して、学校に早く行きたくなった
6　今回のキャンプに参加して、科学の勉強をもっと行いたくなった
7　今回のキャンプに参加する前から､科学の勉強をしたいと思っていた
8　今回のキャンプ活動は楽しかった。

なお、各設問項目には「1 全くそう思わない、2 そう思わない、3 どちらとも言えない、4 そう思う、5 とてもそう思う」の 5 件法で反応させた。

その結果が表 12 である。

表 12 では、質問項目それぞれを事業を行う前と後に参加した子どもに反応させた結果である。人数は、各質問項目をそれぞれ「1 とてもそう思う、2 そう思う、3 どちらとも言えない､4 思わない､5 全く思わない」の 5 件法で反応させた。その尺度を 1 から 5 の各尺度に反応した数である。また、カイ二乗検定は以下の手続きで行った。

5 つの尺度を､「1 とてもそう思う」と「2 そう思う」を肯定的な反応､「3 どちらとも言えない」をそのまま「どちらとも言えない」､「4 そう思わない」と「5 全く思わない」を否定的な反応として『肯定』『どちらとも言えない』『否定』の 3 件に圧縮できると考え圧縮を図った。この 3 件で圧縮した人数分布に事前と事業後に統計的な有意な差があるかないかを見ていった。その結果がカイ二乗値、自由度、そして事前と事後が同じになる確率を示している。

なお、事前と事後で問題が異なるため、事前と事後の差は、該当する問題群をつくり行った。

この表 12 から以下のことが言える。 事前と事後の意識の違いがあるかどうかを見るために行った結果を見る限りでは、事前と事後で統計的な有意な差は見られなかった。今回の活動に参加したことで理科の勉強をもっと行いたくなった、理科の勉強がより好きになった、生き物の勉強をより行いたくなった、天文の勉強をもっと行いたくなったといった反応の大きな変化は全体としては見られなかった。このことは、もともと上記の設問項目に関する意識が高い子どもが参加していることが、事前の結果からも言える。また、理科の学習への意識の高さは、理科の観察・実験を行うことだけでなく、予想や仮説を立てることや結論をまとめることが好きだという反応をしていることからも想定できる。予想や仮説を立てることや結論をまとめることはあまり好きではないという反応を多くの子どもがする傾向があるからである。

統計的な有意な差こそ出ては来なかったが、数的に見ると天体の勉強をしたくなった、生き物の勉強をしたくなったという子どもが増えているともいえる。

③　宿泊を伴う自然体験･野外活動事業のその他の評価

事業後に行った調査問題は前述の道徳観と理科への意識だけでなく、今回の事業に参加して良かった点と悪かった点を 3 つずつ書いてくださいという自由記述も行った。その記述を一覧にまとめたのが表 13 である。

30 人の子どもが記述し、11 人が悪い点はなかったと記述している。また、昆虫採集を主に行った八ヶ岳ふれあい公園での活動中は、雨が降っていた。しかし、その点を悪かった点と上げた子どもはほとんどいなかった。むしろ、雨の中でも楽しく昆虫採集ができたことを記述している子

度もが多くいる。また、理科の勉強が楽しくなった、天体や昆虫のことに興味と関心をさらにもったことを記述している子どもが多くいる。

表13　参加した子どもの自由記述

子ども	良かった点、悪かった点を3つずつ書きだしてください。					
	良い1	良い2	良い3	悪い1	悪い2	悪い3
1	みんなで仲良くできたこと	みんなで協力できたこと	みんなで楽しくできたこと	時間を守れなかったこと	整理整頓があまりできなかった	見学がゆっくりできなかったこと
2	みんなで仲良くできたこと	みんなで協力できたこと	たのしくできたこと	時間を守れなかったこと	整理整頓ができなかった	見学がゆっくりできなかったこと
3	今回標本をつくることが楽しかった	虫が好きになった		なし		
4	なし			いっぱい寝れなかった		
5	新しい友達ができた	理科の勉強が楽しくなった	星・月・天体のことが良くわかった	けんかをしている子が居た	標本作りの時虫を逃がしてしまった	部屋でテレビばっかり見てた
6	友達ができた	積極的に虫をとることができた	天体のことがもっと知りたくなった	けんかを始めようとする言葉をいう子が多かった	前の標本作りと今回の標本作りを比べて前の標本づくりのときもっと積極的にとればよかったと後悔	天体の時、もっとメモを取ればよかった
7	天体観測	昆虫採集	天体（土星など）	なし		
8	虫とり	標本	天体観察	ごはんの量が多かった	熱いお茶じゃないほうがいい	今度から時間ぴったりにしたい
9	虫とりのこと（標本も）	天体観測のこと	友達ができたこと	虫とりの時間がすくない	とまる時間が少ない	雨が降ったこと
10	友達をいっぱい作れた	金星・土星をみれた	虫を捕まえた	なし		
11	今まで知らなかったことを身に付けられら	団体行動をする時の礼儀を身に付けられた	日常でできない事をした	礼儀を知らない人がいた	予定がよく変更になった	
12	自然にふれられた	昆虫採集が面白かった	4人で林の中を助け合い探検した	なし		
13	林の中を男4人で助け合い楽しむことができた	いろいろな虫に会うことができた	自然に感動した	なし		
14	虫とりができた	友達と協力ができた	星の観察ができた	なし		
15	昆虫採集が楽しかったこと	野辺山にしかないお土産を書くことができた	4人で林をかけめぐって自然に触れることができたこと	なし		
16	昆虫を採集し標本を作った	星のことをよく知れた	男4人で林を探検した	思っている昆虫がいなかった	1日目雨だった	
17	新しい友達ができた	自然の中で楽しく遊んだりできた	あまり普段やらないことができた	寝る時間が遅くなった	見学がゆっくりみれなかった	
18	トンボを捕まえられた	ケガをしなかった	良い空気がすえた	採集が思っているよりつまらなかった	書くことがそんなに思いつかなかった	暑かった
19	きれいな星が見れた	昆虫の標本を作れてよかった	ペンションがきれいだった	お風呂場の電気がつかなかった	寝る時間が遅かった	もうすこしゆっくりしたかった
20	昆虫の標本を作れた	友達が増えた	望遠鏡をみれた	お風呂が狭い	雨が降ってしまった	期間が短い
21	友達ができた	理科をもっとしたい	あまり話さなかった	なし		
22	昆虫や虫を触れてきらいが少し好きになった	星のことに少し詳しくなれた	友達と沢山話した	まだ虫が嫌い	積極的に注意ができなかった	残りの時間が少なくって4もっと星を見たかった
23	都会で見かけない虫を見つけられた	都会では見られない星が見れた	他の学校のこと生活して楽しいことができた	自分たちだけで料理を作りたかった	時間に遅れてしまったりした	団体行動ができていなかった
24	友達と仲よくなったこと	星や月を見て感想を伝えあったこと	時間を守ったこと	助け合うことができなかった	友達が少ししかできなかった	話しが想像できなかった
25	昆虫をいっぱいみれたこと	天体のことが分かった	昆虫を標本にするやりかたがわかった	虫をいっぱい触ったこと	バスに酔ったこと	遅くに寝たこと
26	星がきれいだった	標本が面白かった	レーザーがきれいだった（木村先生が使ったポインター）	なし		
27	協力できてよかった	イベントがあってよかった	野辺山で勉強できた	雨が降っていた	パーキングエリアに止まるのが多かった	バスに乗るのが多かった
28	みんなでいたこと	星のことを学んだ		なし		
29	昆虫とふれあえてよかった	はじめと比べて虫が好きになった	標本作りが楽しかった	なし		
30	友達ができたこと	オニヤンマが見れたこと	スズメバチを標本にできた	悪目がねが告げ口をしてきた	採集に雨が降った	悪目がねがおそってきた（意味不明です）

これらの記述を見ても、ねらいとした理科、昆虫や天体への興味・関心を高め、それらに関する技能を高めることに本事業が貢献したという判断はできる。

また、野外活動支援員育成事業に参加した 3 人の受講生がスタッフとして参加した。

この 3 名も昆虫や天体に造詣が深かったり、興味や関心が高かったりしたわけではなかったが子どもと一緒に活動する中で関心を示していた。ないよりも、子ども一人一人の気持ちをとらえた対応を丁寧にやってくれていた。

8　事業評価（外部評価）

平成 26 年 3 月 10 日（火）13 時より、本事業の運営・管理、プログラム内容、受講生の現場での貢献度、地域への貢献度など全体的な事業評価をするための委員会を開催した。外部評価委員会にてあがった評価内容は以下の通りである。

(1)　事業の運営

・児童臨床研究センターで実施している他プログラム同士で共通する課題をどうプログラムに盛り込むかという課題がある。それには「野外活動」が蝶番のように結びつけているところがありそうである。

(2)　野外活動支援員育成プログラム：高橋昇氏（原釜幼稚園）

・初年度に比べ、体験型プログラムで充実した内容になっている。事前事後のアンケートが受講生の生の声を拾えている。
・リスクマネジメントが毎年話題になるが、支援対象によって判断をすることが支援員の能力になると思う。
・支援員は振り返りを多くしていくことが一番重要。数多く支援をしていくことで、自分に欠けていることを気付けるのではないか。
・グループワークも大事だと思う。今の学生は自分たちで考えていくことが難しい。ましてや自然が対象なので、突き詰めていくことが大事だと思う。みんなで話しあって決める難しさについて感じていることがこれからの課題になってくるのだと思う。
・受講認定証を発行するにあたって、学んだことを明記しておくとさらに良いと思う。

(3)　宿泊体験を伴う自然体験・野外活動プログラムの開発：
①林四郎氏(北区教育委員会)

・学生の皆さんは教育現場で野外活動を経験をしているが、創造的に体験をしているところと、プログラムが固定化していて創造的じゃないところもあった。それぞれの自治体のものの考え方によるが、自分たちでその場にあるものを使ってどうするかを考えていくことがないと、体験あって学びなし、という事になってしまう。教師の子供を育てようとする目標が問われているかと思う。ここでは支援員を養成しているので、理想はこうだがこの状況でどうするかを考えていくことも大事。やりにくさとか共通体験的なものが整っていない中で、学生自身も経験不足で虫嫌いになったりするのが、慣れれば麻痺して慣れてくるのも経験だろう。参加させることに意義がある。そういう人が教員になってくれて自然体験を開発して指導に役立ってくれたらいいと思う。東京でも自然体験が少しでもできるという視点でやっていくことに繋がっていく。貴重な 1 歩 2 歩かと思う。
・3 泊くらいはすると良い意味での子供が育つドラマが出るかと思う。また何かに没頭できるというのも大事だが、泊数が多ければ指導者もざっくり構えられて、子供たちが自発的に体験することを促せる。これは人様の子供を預かるので、いろいろと責任の問題もあるので難しい部分もある。
・活動の内容では、野辺山という場所で適した選択をしてもらっているが、例えば川や湖などの

水辺でのものがどういう風に入り込むことができるかなど、できたらうれしいと思った。

②高橋昇氏（原釜幼稚園）

・考えられたプログラムという印象を持った。石井先生が良く考えてくれて、うらやましいくらいの内容になっている。野外活動支援員育成プログラムと連動できればどちらも充実する。体験だけじゃなくて理科的要素を入れたことが、興味関心を広げる機会になっていき、プログラムが魅力的になっている。

・震災前はどこにでも自然があったが、震災後、葉っぱも触れない、外にも出られないとなった。だからこそ自然の持つ素晴らしさ，有難さ、普段そこにあったものの気づきがある。千代田区だから自然がないわけではないので、身近な自然を見つけたり、普段とは違うところでの経験が大事。真似したいくらいのプログラム。いかに考えて作られたプログラムかが伝わってくる。

9　本事業のまとめ（内部評価）

(1)　野外活動支援員育成プログラム

野外活動支援員育成プログラムは、6～7 月に支援員養成講座を集中的に実施し、8 月から現場の派遣依頼に応えていく支援員派遣活動が行われている。まず、事前アンケートを通して受講生の大まかな特徴を抽出すると、その多くは小・中学生時に林間学校やキャンプ活動に参加した経験をもち、自然の中で活動することに何らかの教育的機能があることを認めている一方で、子どもにとっての野外活動の意義や支援者に必要とされる知識・態度等については漠然としたイメージに止まっていると考えられる。以上のような受講生の特徴と昨年度の評価結果を踏まえ、今年度工夫を試みた点は、①現場での子ども支援を見据えた講座内容とすること、②受講生が受け身ではなく主体的に学ぶ契機を取り入れることである。

まず、支援員募集の合同説明会において、プログラムの趣旨と参加者の心がけについて丁寧に説明した。次に養成講座では、野外キャンプに先立ってグループワークを 2 コマ実施し、野外調理・学生企画プログラム・キャンプファイヤー・開講式／閉講式・しおりなどの準備作業（プログラム活動）を活用し、支援者の立場にたってグループ活動を体験する機会を設けた。それに伴って、野外キャンプの場所を受講生による食材購入に便利な氷川キャンプ場に変更した。また、外部講師による講座は昨年度と同様に、現場での子ども支援に活かすことのできる実践的な内容によって実施して頂いた。養成講座の最終日には、支援員派遣活動に接続するための説明会を 1 コマ設け、派遣活動の手続きと留意点について説明し、派遣依頼一覧表を用いて派遣先についても決定した（事務局で配布資料を作成）。

講座終了後、遊び支援の外部講師及び第三者評価員から、体験型プログラムが充実しており、受講生自らキャンプを作り出そうとする姿勢が感じられると指摘があったことはひとつの成果ではないか。その一方で、第三者評価等を通して以下のような新たな課題に気付かされたため、次年度の活動に反映させたいと考える。

①支援員派遣活動後の丁寧なふり返りが必要であり、例えば受講認定証を授与する際に合同のふり返り会を行うことが可能であること

②受講認定証に終了した講座内容を記述することで、今後折に触れ受講状況を確認することが可能になること

③受講生の主体性や実践力を身に付けるため、受講生自ら与えられた場所で創意工夫して活動を生み出していく学習プログラムなども導入する必要があること

④野外活動支援員育成プログラムを通して、受講生のどのような学びの習得を支援していくのか、より具体的な目標を提起していく必要があること

(2)　宿泊を伴う自然体験･野外体験プログラムの開発

25 年度事業の良い点としては、天候の問題はあるにせよ、企画、中身から言っても問題なくよいものになった。また、運営面においても初年度であったがとてもスムーズに進んでいった。何よりも大きな事故などはなく、保険も使わずに済んだことは良かったと言える。

また、野外活動支援員養成で育った学生がスタッフとして参加し、こちらも養成の成果を見る一つのよい場面になった。今後様々な機会に生かしていきたい。子ども学びの中に、大人から学

ぶという要素がある。そのあたりも生かしていきたい。

25 年度事業の問題点としては、以下の点をあげることができる。

①調査問題の吟味である。ねらいに即して吟味をして行く必要がある。

②スタッフに対するアンケートを作成し評価に生かしていきたい。

③支援事業とのさらなる連携を明確にさせていく必要がある。

④天候の問題、宿泊数の問題を今後の検討課題としたい。

10　おわりに

本年度も無事に報告書を出すことができましたこと、関係者の皆さまのご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

「千代田区内の子どもの野外活動体験プログラムの開発」の責任者は石井雅幸先生を中心に展開されたものです。石井先生は、後期 10 月からの海外研修の準備と並行しての研究活動は大変だったと思いますが、努力がここに実りました。

本研究の成果として「参加した子どもの自然に対する興味・関心の高さと今後への期待の高さ（より、知的に高いレベルでの自然への興味・関心を高めることができる可能性)」「都市部に生活する子どもの自然体験と理科等の学びの関連を高める可能性」が確認されたことは、理科離れが言われて久しい昨今、うれしい発見でした。

また、児童臨床研究センターにおいて加藤、川之上先生を中心として養成している野外活動支援員の活動の場を、これまでの近隣の幼稚園・保育所の園外活動への参加などに加えて、宿泊体験をサポートするというように活動の場が広がったこともうれしいことでした。

さらに、今回の研究において、野外活動支援員の活動の成果を直接評価できる可能性も示唆され、実りの多い研究だったと自負しています。

本研究を契機に、自然体験を含む野外体験が希薄になりがちな都会の子どもたちに、実態を踏まえて宿泊を伴う自然体験プログラムを継続させていく予定です。宿泊日数についての課題として外部評価委員から指摘があった「2 泊以上」、つまり、子どものありのままの姿が出やすい宿泊日数を検討し、お客様としてではない、まさに自然の中で行動する主体としての子どもの姿に基づいて、自然の体験が生かされるプログラムの作成を目指していきたいと考えています。

今後ともご指導とご協力を賜りたくお願い申し上げます。

平成 26 年 3 月末日

大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター
所長　阿部　和子

平成 25 年度
千代田区委託　千代田学
「千代田区内の子どもの野外活動体験プログラムの開発」
成果報告書

平成 26 年 3 月 31 日発行

発行者：　大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター
〒102-8357　東京都千代田区三番町 12
TEL: 03-5275-6129　　FAX: 03-5275-5252
E-mail: jirinken@ml.otsuma.ac.jp
HP: http://www.home.otsuma.ac.jp/center/